

日本家庭辭書の一節

西山 愨 治

あい(愛)、愛とは自己の好む對手に向つて善意なる好意、親切心を以て待遇するを謂ふ、人に愛てふ、心あるが故に家庭の平和、國家に安寧秩序を見るなり、實に社會は愛の鎖もて固く連結されたる團體なりと謂ふべし。自己を愛するを愛己(利己)と謂ひ、他人を愛するを愛他(利他)と謂ふ此れ倫理學上、利己主義、利他主義(公衆利用論)の分る、所以にして、利己、利他をよく調和し其の輕重前後を誤らず、以て偏愛に陥らざるは道德的行爲の理想なり、又、父母の子に對する愛に至つては決して溺愛に失せざるを要とす。尙ほ(本書四頁)あいじやう。(愛情)の項を參照すべし。

らるゝが常なり。外人風(がいじんふう)に思家病(ししかびょう) (ホームシツク)を誦(うた)へる實に其のところなり、殊に我國の家庭は家族共同の制度を律し、接する人多く而も團結力強きが故に我れを容れて生育せし我家を思ひ愛するの心強きは自然の理にして、幼少の時も今も猶ほ、病の時も夜も晝も、雨風の日も雪の夜も、我れを育て、生ひ立てし其の我が家が假令賤の茅屋なりとも他の金殿玉樓に勝る幾倍なるを知らず。されば父母兄弟は子女弟妹と共に樂しく家庭の平和を保持し以て強き愛家の精神を涵養せざるべからず。

六十

あいきやうしん(愛郷心) 人は故郷に生れ此の地に遊び、此處に人となれるを以て長く其の故郷を記憶す。愛郷心とは其の郷里を愛するの念慮にして愛家心より發して、愛國心の基礎となるべきもの、而も此の心たるや人に固有なれば、宜く愛郷心を利用して郷里に關する正當なる地理歴史上の知識を與ふると共に大に奮發心を養成し郷里の爲めに盡す強き愛郷の念より努力して遂に其の身を高きに致すべきことを自覺せしめざるべ

からず。

あいけう。(愛嬌)

愛嬌は交際を圓滑ならしむるに預つて偉大なる力を有するものにして婦人に愛嬌なきは尙ほ玉に瑾の思ひあり。而して愛嬌は修養の如何によりて之れを養成し得るなり。其は何人をも人として交際するに上下の區別なく人格を重じ、先づ自己の心を修め、何人に對しても親切の心を養ふにあり。而も愛嬌は一に精神より發し言語に於て、舉動に於て、或は顔容に表はれ人をして愉快に感ぜしむれども其は自然に心の底より識らず知らずに湧き出でしものならざるべからず。此かる眞の愛嬌を有する人は眞直に其の身の實にして家庭の平和も此の主婦の愛嬌に依るものと謂ふべし。

あいこ。(愛己)

りこ。(利己)の項を参照すべし。

あいくしん。(愛國心)

愛國心は一國の歴史と共に自然に生ずる情操にして其の萌芽は愛家心、及び愛郷心に發し、知識の進歩するに従つて此の情を一國に及ぼさんとす。而して愛國心

の強弱消長は實に一國の死活、運命を左右するものにして、若し民に、愛國の念を缺かば國家の元氣は忽に消滅して其の獨立をさへ危きに致さん。されば國家の活動發展は一に國民の愛國心に待つものと謂ふべし。我國の今日あるは我が忠良なる祖先が強き愛國心の美果にして、我國民たるもの常に強き愛國の精神を以て尊王よく國家を愛護し一旦緩急あらば其の身を獻じて國家に犠牲するの信念なかるべからず。是れ單に皇國に對するの道たるのみならず。又、我が祖先に報い、子孫に示す所以なれば、子女の愛國心を養生す可く我國體の世界に無比なる所以を説き、其の國難に際して忠君の勇士が取りし態度、逸話平時に於ては文明富強に力を注ぎ能く自己の分を守つて其の天職を全うせし忠臣志士の傳記を以てして其の精神を鼓舞するを要す。然れども自國のみ過重するの極毫も他國を顧みず、世界に於ける自國の地位をも辨へずして徒らに他を卑しとなすが如き偏狹極端なる愛國心を養成せざるやう十分此の點に注意せざるべからず。

あいじやう(愛情)

愛情とは自己の好む

ものに合體せんとする自發の情緒にして夙に赤子は慈母に此の愛情を呈せんとす、然れども兒童の愛情や甚だ變化性に富み、一時的にして極めて變り易く一定せざるものあるは記憶力薄弱にして且經驗の足らざるに因る。愛情は其の對象を自我と同一視して其の善からんを希ひ。其の幸福なる状態を見ては尙ほ自己の有するもの、如くに喜ぶ。親子間に於て或は夫婦の間に於ける愛情は其の度に於て最も強くして而も純潔なり、若し親にして愛情なからんか何んぞ能く其の子女の心情を發達せしめ得べき、實に親子間の愛情は生命にして血液なり、未だ愛情なき教育の成功せるを耳にせず此れを夫婦に見る、愛情なき夫婦にして何ぞ家庭の和樂、圓滿を見んや。家庭は愛情によりて成立するものにして愛情は根本的の要素たるを失はずされど愛情の性質として動もすれば偏愛、溺愛に陥り易きが故に之れに理性より發せる正義の觀念即ち義務の念を以て節するを必要とす、愛情は猶ほ石油の如く正義は恰も火に似たり、火なくして

石油の燃ゆるは實に危険なると一般義務の念を外にして獨り愛情を恣にせんか其の向ふところを知らず。されば常に愛情と義務とを調和し愛情の念餘りて猶ほ敬重の精神を失はざるを要す。其の子女を教育するに當つても一方に於ては濃厚なる愛情を以て暖むると同時に猶ほ他方に於ては義務の念を導いて冷し以て適度に之れを節制し力めて其の純潔を期せざるべからず。

あيسくりむ。

アイスクリームは

夏季に於て賞用せらるゝ西洋菓子的一種にして此れを製するには砂糖四十匁を鍋に入れ、次に卵四個、更に牛乳二合を入れて火に近づけ静かに攪きませつゝ、煉り、湯氣の立つ頃裏漉に通しアイスクリーム器に入れて水に冷し、碎きたる氷を布に包みて鹽二合許りを加へてアイスクリーム器の周圍に詰め置き其の器を數百回廻して凍らしむ、此れを客に出すには洋盃に盛りて匙を添ふべしアイスクリーム器なく、牛乳を得ざる土地に於ては煉乳を大匙に二杯と卵二個とを二合許りの湯に薄め、半斤入の茶筒へ入れて蓋をなし米桶の深きものへ

入れて中間に氷を埋め上に鹽を置く、厚き毛布又はフランネルを蔽ひ以て氷を溶解せざらしむ。十分間毎に攪拌すれば一時間にして凍る。毛布もて蔽はずして怠らず茶筒を廻轉せしむれば更に可なり、猶ほ上等のアイスクリームを製するには卵の黄味二個、砂糖大匙二杯、牛乳一合を熱して更に新鮮なるクリーム一合にレモン油を加へ香料を施して凍らしむべし。

あかご(赤子)

赤子の運動は啼泣にあり、泣くことに依りて肺を強くす故に少々啼泣するも他の食物は決して與ふべからず。赤子の胃は辛じて母乳を消化する力のみ有するものなれば赤子は砂糖水をさへ消化するを能はざる状態にあるなり。されば胎内に於て受けし毒を消さん爲めとして五香、或は鵝胡菜の如きを用ひ大下痢を起さしむるが如きは實に其の危険の度思はざるの甚だしきものと云ふべし、母乳中には多量の下痢劑を含み居るが故に決して下痢劑などを用ふるを要せざるなり、我國にては七夜の當日に赤子の頭髮を剃る習慣あれども赤子に取りては初毛は最も大切に

て此れを剃らば感胃に罹り驚風に侵され遂には往々死に至らしむるが如きことあるが故に、初毛を剃るを嚴禁せざるべからず。又毎日入湯せしめてよく赤子の身體を検査し異常あらば醫師を招くべく殊に眼、口、耳、鼻などは常に注意して此れを清潔に保たせざるべからず。

あかごのゑいせい(赤子の衛生)

赤子は産湯後も攝氏三十六七度の湯に六七分間毎朝入浴せしめ身體を清潔ならしむべし、湯の浴せ方は頭部のみを露出して全身を湯に入れ柔き布にて徐ろに洗ひ、別器に湯を入れて眼を洗ふに先づ外眦より内眦の方へ綿もて靜かに拭ひ洗ふべし。小兒生れて二三日にして黄色を呈すれども此は赤子の黄疸とて別に恐るべきにあらず、自然に癒ゆべし臍帯の切れし後は清潔にして綿を當つべし、赤子は腹にて呼吸するか故に帯は極めて緩やかなるを要す。又、初毛は赤子の頭を保護するものなれば決して剃り落